

ふたごと結婚すると

ふたごやスーパー・ツインを子育て中の人には、まだちょっと早い話題ですが、ふたごと結婚ないしはパートナーシップを結んだ人たちのことを書きます。そうです。ふたごの配偶者についてです。今回は、全部男性の一卵性双生児の配偶者の話ですから、その分割り引いて読んでいただくと幸いです。でも、いろいろと考えさせられます。

随分前の話ですが、1992年に東京で「国際双生児研究会議」が開催され、僕もメジャー・リーグの「ツインズ」のヘッド・キャップを被って参加しました（まじめな研究者が多いせいか、誰の目にもとまらなかった。残念！）。その時、アメリカからキース兄弟が参加していました。キースさんは、もう60歳近くの熟年でしたが、全く同じスーツをお揃いで着て、本当に嬉しそうにしていました。僕は、こんな感じの熟年ふたごになれるたらいいなあと、本気でうらやましく思いました。そのキースさんがある本（武先生の『ふたごの話、五つ子の秘密』講談社）の中でご自分の結婚生活について語っています。

「ふたごの結婚にはむずかしい点があります。ふたごと結婚する人は、ふたごのあいだにはほかの人にはわからない強いつながりがあることを理解した人でなければなりません。一卵性双生児のあいだのつながりは、母や父より、他の兄弟より、そして妻や夫より強いものがあるのです。兄のルイスは、私について妻や母が知らないことを知っています。私もまた、彼の妻が知らないルイスの秘密を知っています。ふたごの連れ合いになる人は、ふたごのあいだにある特別な絆に嫉妬心をもってはいけません。結婚したあとでも、ふたごが二人だけで出かけることを許すくらい寛大でなければなりません」と。そして、キースさんは忍耐強い配偶者に恵まれ、幸せな結婚生活を送っているそうです。しかし、お兄さんのルイスさんは一度離婚を経験し、その後やはりふたごに対して寛容な心を持った女性と再婚し、現在ではよい結婚生活を送っているということです。

ルイスさんのふたごの絆と結婚生活についての発言は、少し誇張気味かもしれませんが、それでも重要なことを示唆していると思います。そこで、もう少し考えてみたくて、自分の近辺でインタビューをしました。生まれて初めて妻にインタビューをしたわけです。それから、もう一人ふたごと結婚している女性にも訊いてみました。

まず、妻の方ですが、弟の家族がもう少し近くに住んでいて、行き来がもっとあれば、ちがった感覚だったかもしれないということと、自分の夫のことだから本当の本当の本心ではないかもしれないという前提で話してくれました。

まず、ふたごと結婚して面白いと感じたことです。ふたごの相手の自慢をすると自分自身の自慢になるかどうかわからないのですが、とにかく僕がふたごの相棒の自慢をしたがるというのです。本当に嬉しそうに相棒のことを語っているらしいです。次に、気を使っていることですが、ふたごへの否定的評価をしないということだそうです。僕はぜんぜん覚えていないのですが、相棒について彼女が一度ほんの少し批判めいたことを言ったら、僕がものすごく怒ったそうです。そういえば、子どもの頃、二人でけんかをしていても、親が片一方をしかると、必ず二人で結託して向かって行ったそうです。けんかをしていても、すぐに一致団結して、親に逆らったようです。ですから、それ以来決して相棒に関してはネガティブなことを言わないように気をつけているとのこと。それから、気にしていることですが、一卵性なので同じ遺伝子をもっているはずなのに、僕の方に生活習慣病の傾向や腰痛などが出ると、自分が悪いのかなあと感じてしまうそうです。この辺りは、本人の責任がかなりあるのですが、やはり妻

としては気にかかるところのようです。ちなみに相棒は、ヨガをやっているので、腰痛にならないようです。

さて、もう一人のふたごの妻の話をまとめてみましょう。まずは、面白い事（またははた迷惑な事）ですが、「二人は気配がそっくり。我が家に両方いて私が料理等に集中している時、簡単な会話をした後、正直言うとどちらと話したか迷う。また話したつもりの一方が反対側から出てきたりすると、一瞬眩暈を覚え、なかなかスリリングで面白い。」よく言われることですが、やはりふたごは雰囲気や仕草、声がよく似ているようです。これを「スリリング」「面白い」といえるところは、キースさんの妻の寛容な部分と共通しているのかもしれませんが。

次に、感心することといえば、「二人絆の深さ。と言うべきか存在の近さと言うべきか。私には到底及ばない仲で、嫉妬を私を感じないのは不思議といえば不思議。でも全く私には興味を持っていないようで、それはちょっと笑う。それから、根本的に単純で揺るがない自信を持っているような気がする。私はふたごゆえだと思うけど、単に性格なのか、よくわからない。どんなふうに自意識を持っているのか、孤独を感じたり、または感じないのか聞いてみたい気もする。でも自分の事を振り返ったり、妻のご機嫌を伺ったりせず、ふたごの弟の活動や株の動向に集中している夫は、わりと好きです。」嫉妬しないところもふたごの配偶者の一番大切なところを押さえていると思われるのですが、ふたごは「根本的に単純で揺るがない自信をもっている」と感じているところは唸りました。「ふたごゆえ」と書いていますが、ふたごは無意識にしっかりと精神的にも支えあっているということなののでしょうか？ もし、そうだとしたら素晴らしいことだと思います。その意味で、しっかりと自意識の育った自立性に裏打ちされた絆ということが、配偶者だけではなく、ふたご自身にとっても幸せな結婚・パートナーシップの前提になるのかもしれませんが。

最後に、ツインズマザーズクラブの天羽先生の所の息子さん達のこと書かせておきます。天羽先生の息子さんたちの妻同士も大変仲がよいそうです。お二人はそれぞれの夫の癖などを交換して、そっくりだとか言って笑い転げるそうですが、そうしたことが、妻同士の関係にも随分プラスに作用したようです。そういえば同じようなことが、僕達の娘達にも言えます。僕にも相棒にも娘が二人いるのですが、残念ながら一年に一度か二度会うか会わないかの状況です。でも、久しぶりに会うと、娘4人で、「そっくりだ」とか「似てる、似てる」と父親を話のネタにして、仲良くなるきっかけにしたりしています。ということで、人一倍つながり強いふたごが、逆に人と人をつなぐ役割を果たせるのなら、これは望外の喜びです。今後は、男女のふたごの配偶者の意見なども聞いてみたいと思っています。

『ツインズぶらす』第9号（多胎育児サポートネットワーク）から転載・修正